

THE UNITED KINGDOM PICK UP!!

英国貴族社会のルールと価値観 「ダウントン・アビー」の世界を垣間見る

日本でも、おなじみ英国の連続テレビドラマ「ダウントン・アビー」は、お部下英国でも爆発的な人気を博している。昨年末のクリスマス映画中には「クリスマス編」が特別放映され、英国中のファンが画面に釘付けになった。館の理やかなクイズとマズリーにため息をついた人も多かったろう。昔ほどではないけれど、今も緩やかな階級制度が現存する英国、そんな社会に住む英国人にとって、ダウントンって何なのだろうか。

人気の紐靴をファンたちにさいてみると、「当時のファッションやライフスタイルが魅力的」と答える人が多い。「典型的な英国貴族の三世代のまちまちな生き様が面白い」や、「とにかく、舞台とある能がゴージャス」など、見どころはさまざま。が、根底は「古き良き時代」を得る、英国人特有の「ノスタルジア」があると思う。

昔の上流社会は実に濃厚な趣だった。大英帝国時代の繁栄を追い風に蓄積した巨額の富、広大な敷地に巨大な館、王室と血縁関係を結んだり社交界を出入りする。その暮らしぶりには伝統の重みと整さがあった。当時は英国中にダウントン級の領主様たちが林立して、いわば英国版富、一握りの人たちが傾倒して分業していたようなものだった。

だが、「重厚な上流階級」とは、重みのある飾りの作りがらみ飾りの装束だけを指すのではない、それは正に「血の濃さ」と言えばよいのか、つまり当時の本物の貴族とは単純に「生まれ」で決まったというところだ。ダウントンでは、ロバート伯爵の母親であるバイオレット伯爵夫人が本物の貴族。貴族の家に生まれただけが貴族で、その人たちは「運命の当りくじをひいた」特権階級だ。これを英国では「伯爵のスパーンを口にくわえて生まれた」と形容する。そして、生まれながらの貴族は貴族と結婚し、純粋伯爵のソサエティを形成していったのだ。



貴族社会のルールと価値観

外界を遮断したようなカプセルの中のソサエティには独特のマナーがあり、話す英語のアクセントや声の発声法まで異なる。それは今も、現存する貴族生まれの人たちと話すとき、その名残がわかる。英国あるコメディアンが「ある貴族と一緒に釣りをした時、彼は実な音を出すだけで、何を言っているのか全くわからなかった」と苦笑。彼らは貴族英語を使ったギャグで人気を博した。ダウントンの場合、テレビ番組なので、貴族アクセントは注目目にしてある。

妙な英語を話す貴族たちとコミュニケーションをどうとする際、聞き手が想像を巡らせなければならない。何故なら質問しても、答えが無い、相手に自分の本意を掴ませないためか、簡単に、あざざり過ぎ、ま



ずい過去があったり、失敗があったりしても、その事には絶対に触れて、何事もなかったように振る舞う。人が失敗しても気づかない、見て見ぬふり。それはそうだろう。世間の目だけでなく、館の中には召使いたちが密に、控えて聞き耳を立てている。いわば帝王学を身につけた人たちとも言える。

ダウントンは、この貴族たちのソサエティの過渡期を揺らしている。確かに、館の現行当主ロバート伯爵も銀のスパーンを口にくわえて生まれた真正正統の貴族。が、結婚相手のコーラはアメリカ人。彼女の父親は、叩き上げの移民の国アメリカの東海岸コネチカットで牧場販売によって財を築いた大富豪という設定だ。ロバート伯爵は何故、英国内の貴族の令嬢と結婚しなかったか、母親のバイオレット伯爵夫人も、何故、そのような結婚を許したのか。

答えはもちろん金だ。米国の遺産分配は、昔から、若い女性でも巨額な持産金ももらえた。ところが、当時の英国では長男にのみが偏ったため、名家の令嬢の持産金は押し知るべしだった。一方、米国の成金が求めたのは「血脈」、つまり貴族の称号だ。地位を求め、資金が必要な者同士が結婚、つまり、バイオレット伯爵夫人にとって息子の結婚は「財に換えられないもの」だった。



貴族の称号を求めて

「お金で貴族の称号を買う」のは、現代の英国社会でもありだ。実際、貴族の称号を売買する市場まであるから聞く、お金を出せば、売りに出された由緒ある家紋なども手に入る。アメリカ富豪の令嬢が英

国貴族の火の事状態の台所を救済する結婚は当時、案外多かった。アメリカオハイオ州の鉄道王。その令嬢が900万ドルの持産金を持って、どこぞの貴族に嫁いだのが「全盛の令嬢」(トウ)というふうな話だ。が、あちこちに、後に英国の首相となったウィンストン・チャーチルの母親も然りだ。「ダウントン」では、ロバート伯爵とコーラ夫人の夫婦仲が良いので救われる。

けれども、この結婚は、またしても上流階級の伝統を破るが結果を招く。2人には美しい3人の娘が与えられたが、ロバート伯爵の権を継ぐべきの男子の子が生まれなかった。資金難に陥っている貴族の次男坊や三男坊を婿に迎えても、グラッドサム家は今の益にもならない、血統と金力と愛情のバランスを常に考えなければならぬのが貴族の宿命だ。

オスカーに輝くシナリオライター、ダウントンを書き下ろしたジュリアン・フェローズは、男爵の称号を持つ。が、元はと言えば彼の先祖はマナーハウスの召使だったそう。彼はケント公爵夫人の側近だったエマ令嬢と結婚して上流に食い込んだ。「結婚のおかげで、すっかり自信がついた」(フェローズ)そうだ。だからダウントンの限上の人たち(ご主人様)と、階下の人たち(召使いたち)の日常、館の維持費、世間体、子孫の存続と繁栄等、上流が抱える明確な、臨場感を持って描れるのかもしれない。

文・山形優子フットマン(在英ジャーナリスト)

「ダウントン・アビー」

シーズン2
4月8日(水)
ブルーレイ&DVDリリース
シーズン3
5月15日(金)
ブルーレイ&DVDリリース
downtonabbey.jp



発売元:東宝映像コミュニケーションズ
© 2011 Carlton Film & Television Limited. All Rights Reserved.